



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	序文
Author(s)	西山, 徳明
Relation	コンテンツ・ツーリズム研究の射程 : 国際研究の可能性と課題 = The Scope of Contents Tourism Studies : Proceedings of the Symposium: "International Comparative Research on the Spreading and Reception of Culture through Contents Tourism", held at Hokkaido University(15-16 March 2015).
Citation	CATS 叢書, 8, i - ii
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61132
Rights	© 2016 西山徳明
Type	other
File Information	CATS8_0-forewor.pdf



序文

西山徳明

北海道大学観光学高等研究センター長・教授

本書は、2015年3月15日と16日に開催された、第3回観光創造研究会「コンテンツ・ツーリズムを通じた文化の伝播と受容に関する国際比較」での報告、議論を取りまとめたものである。観光創造研究会とは、北海道大学観光学高等研究センターが主体となり、日本における観光研究のさらなる発展を目的に開催しているものである。各回でテーマを定め、その分野の研究者、実務者を全国から札幌へと招き、2013年秋から1年に2回の頻度で開催している。この研究会は、1999年度から2008年度にわたって開催された「国立民族学博物館における共同研究会」を継承するものである。同会では、日本中の観光に関連する研究者が一堂に会し共同研究を実施した。その10年は、日本に從來なかった観光研究が大きく展開された時期であったが、その中心に民博の研究会があったのではないかと自負しており、さらなる発展の場所を北海道に移し、本研究会を開催している。

先日、私はスペイン第一の観光研究機関であるバルセロナ大学や、マドリードに本部を置く国連世界観光機関（UNWTO）を訪問する機会を得た。そこで議論となったのが、国際社会に対し、日本の観光の動向、特に観光研究に関する動向が十分に発信されていないという点であった。同様の課題は他の領域の研究分野でも共通するところではあろうが、日本の観光研究を深め世界へ発信する必要性を痛切に感じた経験であり、この観光創造研究会もそのための場として機能させていかねばならないと考えるところである。その意味においては、コンテンツ・ツーリズム研究を切り拓いてきた山村高淑、シートン・フィリップの両教授を中心にして、国際的な共同研究の体制が整いつつあることは有意義なことであり、またその成果の一端をこうして世に問うことができるのは大変喜ばしい。

北海道大学観光学高等研究センターでは、観光に関して広範な研究分野を持つものの、近年では大きく2つのテーマについて重点的に研究を行っている。一方が、第1回の観光創造研究会でテーマとしたCBT（コミュニティ・ベースト・ツーリズム）であり、他方がコンテンツ・ツーリズムである。CBTは観光という現象のさまざまな面に関わりがあり、必ずしもコンテンツ・ツーリズムと明確に区分できるものではなく、コンテンツ・ツーリズムの中にCBTの要素も当然ありうる。しかしながら、このコンテンツ・ツーリズムに関しては、近年は非常に大きな社会的話題になると同時に、もっとも成長が見込まれる観光分野でもあり、今回の研究会のテーマとして取り上げることとなった。この分野の研究で最前線を走る研究者、さらに実務者を多く招くことができ、非常に建設的な議論が展開された。コンテンツ・ツーリズム研究においては、いまだに統一的な概念や理論的枠組みが整っているとは言いがたい状況にある。しかし、本書のタイトルが示すように、同研究の、特に国際研究としての可能性と課題は、本研究会で明らかにできたのではないかと、会を主宰する立場として考えているところである。

